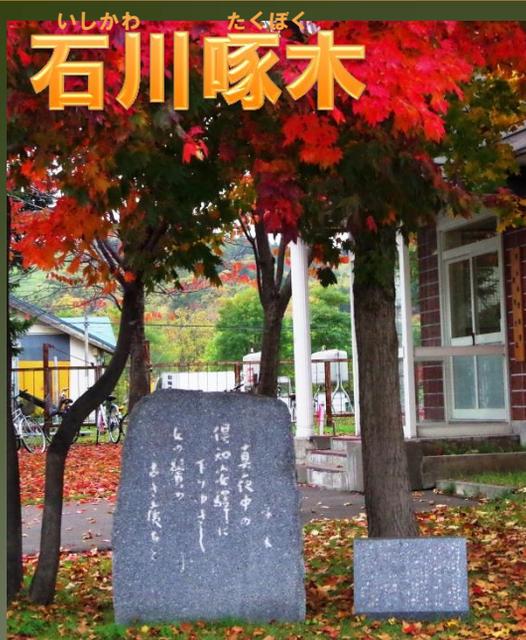


# 後志文学 ツーリズム 〈羊蹄山麓編〉

**後志には、文学がある。**

後志を舞台にした文学は、実はたくさんあります。  
誰もが知っているあの作品から、ちょっと意外なあの作品も……。文学の舞台を訪ね歩くと、その地の歴史や文化が見えてきます。

今回は、ちょっと違った視点から後志を旅してみませんか。



① 倶知安駅 石川啄木 歌碑

そこから少し山の方へ行ったところにある旭ヶ丘公園にも、もう一つの啄木の歌碑があります。

「馬鈴薯の花咲く頃となれにけり  
君もこの花を 好きたまふらむ」

碑の台座に書かれた建立要旨には、  
「馬鈴薯の花を愛し、啄木に心を寄せる人たちが、ふるさとにつながる若き日を偲ぶよすがにと、この歌碑を建立した」とあります。

ここでいう「君」とは函館時代の同僚、橘美智子のこと。白く可憐な馬鈴薯の花は、素朴で美しい北の乙女のイメージでしょうか。

はやし ふみこ  
**林 美美子**



③ ひらふ高原中央公園 林美美子文学碑

まずは、小樽市内編でも登場した石川啄木から。倶知安駅の右手、交番の前に歌碑があります。

「真夜中の 倶知安駅に下りゆきし 女の鬢の 古き 痕あと」

啄木は、函館の尋常小学校で教師をしていましたが、大火で焼け出され、札幌の北門新聞社に勤めることとなりました。明治40年9月14日、函館本線で札幌に向かう途中、倶知安駅に降りたった啄木。その時のことを詠んだ歌です。

「鬢に古い痕あとのある女は、実景であったのか、それとも真夜中の倶知安駅のイメージにふさわしいものとして、あるいは職を求めて旅するみずからの心象として創り出したものであったのかは、定かではない。」

横にある建立要旨にはこう書かれています。当時の倶知安は電灯もありませんでした。降り立ったのは深夜。真っ暗な倶知安駅で先を急ぐ女性の姿に影を感じ、そこに流浪の身である自分自身を重ね合わせたのかもかもしれません。



② 旭ヶ丘公園 中央広場「石川啄木歌碑」

「放浪記」で有名な昭和の女流作家、林美美子も、この地を訪れています。

旅好きだった彼女は、昭和9年5月25日、この倶知安の地に降り立ちました。そして、ニセコの風光が大変気に入って、その印象を色紙に残しました。

「青き山なり ニセコの山は  
吾心また青々 心涼しむ」

この碑はスキー場と国立公園の記念碑も兼ねていることから、横にシルバーのスキー板を模したオブジェがついています。冬になると、このあたりには外国人スキーヤーが溢れます。見渡すと、あちこちに外資系ホテルの建設現場が。約80年後、この地がこのような姿になるとは、林美美子も想像だにできなかったことでしょう。

文学碑巡りばかりで少し飽きてきた頃でしょうか。それでは、秋の気持ちのいい風を感じながら、お散歩などいかがでしょう。

国道5号をしばらく降りていくと、羊蹄山の登山道へ続く道があります。少し左にそれると、芙美子も訪れた山の中のみずうみ「半月湖」があります。行ってみましょう。

駐車場に車を停めて、看板に沿って歩いて行きます。



↓  
駐車場に車を停めて・・・



→  
倒木に注意！



↓  
ちょっとしたあずまやが見えてきたり・・・

半月湖の看板を見ながら山道を歩いて行くと・・・



足下が滑ることがあるので気をつけてね！



文字が消えかかった看板があったりして・・・

一人で来たことを少し後悔しながらも、さらに落ち葉の降り積もる道を歩くと・・・



やっとなんか見えてきた！！



可愛い赤い実を見つけたい・・・



→  
こんな奇怪な岩を横目に見ながらも、さらに歩くこと5分ほど、すると・・・





## 半月湖がありました。

### ④ 半月湖

「山の上に小さい沼のような湖が見えた。／こんもりした林に囲われて、沈んだ緑の湖が森閑と静まりかえっている。湖の水面にはかなり波紋のような小波が立っていた（中略）ペースが時々何かに向かって吠えた。その吠える声が山彦のように湖の上に反響している。誰も知らないようなところに置き忘れたお月様と云った小さくて優しい湖だった。周囲は二キロぐらいもあるであろうか。時々魚の影が水面に浮かんできた。」（林芙美子「田園日記」）

半月湖は、羊蹄山北西山麓、海拔約270mにある平均水深4m、最深部18.2m程の火口湖です。

その昔は、鯉の養殖が行われたり、貸しボートがあって観光客で賑わったこともあったそう。今は一帯が自然公園となっています。



少し上から見ると、先の方がとがっているのが見えます。半月まではあと少し、といったところでしょうか。

紅葉がちょうど見頃でした。晴れた日は水面に映って、えも言われぬ景色が広がることでしょう。

しばし一息。静けさに耳を澄ますと、心がしんと、澄み渡るようです。

## ありしま 有島 武郎 たけお



### ⑤ 有島記念館

〒048-1531 虻田郡ニセコ町字有島57番地

Tel.0136-44-3245

開館時間 9:00~17:00（入館は16:30まで）

休館日 毎週月曜日（5月~9月は無休、祝日の場合は翌日休館）年末年始

入館料 一般500円、高校生100円、小中学生 無料

さて、ニセコといえば白樺派を代表する作家、有島武郎です。

ニセコ（当時は狩太）を舞台に「カインの末裔」、「生れ出づる悩み」、「親子」などを発表し、その名を世に知らしめた彼は、思想と実生活の一致を求めて、所有する農場を小作人に開放しました。

農場のあった場所には、「有島記念館」があります。

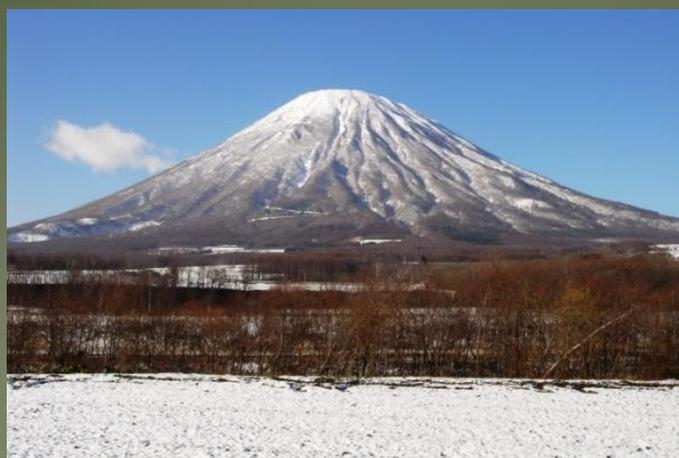
壁にからまったツタが真っ赤に色づき、手前に植え込まれたニセコ町の町花ラベンダーとのコントラストが見事です。

レンガ造りの館内では、ランプのような温かな光の中で、有島武郎の生涯を物語る数々の資料が展示されています。思想と実生活の一元化を求め、誠実に生きた人柄が偲べれます。

有島家とニセコの関係は、武郎の父、武が明治31年にマッカリベツ原野（現ニセコ町）貸下を申請したことに始まります。明治41年、農場を武郎名義に改めますが、社会主義に傾倒していた武郎は、農場経営に後ろめたさを感じていました。そして、父の没後の大正11年、ついに彼は、農場を小作人全員の共有として無償解放することを宣言するのです。



雨のため撮影は断念しましたが、記念館から少し歩いたところには「農場解放記念碑」があります。旧小作人たちが、解放を決断した農場主への恩を後世に語り継ぐために、大正13年に建設しました。



#### ⑥マッカリヌプリ（羊蹄山）

右に紹介したのは、「カインの末裔」の冒頭部分です。この作品は北海道の厳しい自然を舞台に「自然から今切り取ったばかりのような」粗野な農夫が自然にも社会にもなじめず転落していく様子を骨太に描いたもの。

有島武郎は、この作品で文壇での地位を確立しました。北海道文学の金字塔ともいえるこの作品は、小林多喜二をはじめ、多くの作家に影響を与えたといわれています。

物語に色彩を与えるのが、季節ごとに切り変わるマッカリヌプリの姿。時を経た今も変わらず、私たちに自然の素晴らしさと厳しさを教えてくれます。

「彼は毎日々々小屋の前に仁王立になって、五箇月間積り重なった雪の解けたために膿み放題に膿んだ畑から、恵み深い日の光に照らされて水蒸気の濛々と立ち上る様を待ち遠しげに眺めやった。

マッカリヌプリは毎日紫色に暖かく霞んだ。林の中の雪の叢消え（むらぎえ）の間には福寿草の茎が先ず緑をつけた。つぐみとしじゅうからとが枯枝をわたってしめやかなさゝ啼きを伝えはじめた。」

（「カインの末裔」より）

「長い影を地にひいて、瘦馬（やせうま）の手綱を取りながら、彼れは黙りこくって歩いた。

大きな汚い風呂敷包と一緒に、章魚（たこ）のように頭ばかり大きい赤坊をおぶった彼れの妻は、少し跛脚（ちんぱ）をひきながら三、四間も離れてその跡からとぼとぼとついて行った。

北海道の冬は空まで逼（せま）っていた。

蝦夷富士といわれるマッカリヌプリの麓に続く胆振の大草原を日本海から内浦湾に吹きぬける西風が、打ち寄せる紆濤（うねり）のように跡から跡から吹き払っていった。

寒い風だ。

見上げると、八合目まで雪になったマッカリヌプリは少し頭を前にこごめて風に歯向かいながら黙ったまま突っ立っていた。

昆布岳の斜面に小さく集った雲の塊を眼がけて日は沈みかかっていた。草原の上には一本の樹木も生えていなかった。心細いほど真直な一筋道を、彼れと彼れの妻だけが、よろよろと歩く二本の立木のように動いて行った。」



3月。春を待つ羊蹄山。

# 小林多喜二「東俱知安行」

さて、再び小林多喜二にご登場願ひましょう。昭和3年2月15日、5日後に行われる、国内初の男子普通選挙に向けての応援演説のため、多喜二は俱知安駅に下り立ち、さらに馬橋に乗って東俱知安（現在の京極町）へと向かいます。その時のことを描いたルポルタージュが、「東俱知安行」です。

「汽車から下りると、すぐ眼の前にぶつかるようにマッカリヌプリが晴れた冬空に浮かんでいるのが見えた。そのだぶっ広い裾野にある俱知安の町並は、雪の中から屋根だけを出してうずまっていた。」（「東俱知安行」）



「馬橋はすぐ町の外に出てしまった。右手は広漠とした裾野で、マッカリヌプリがペンキ絵の富士山のように聳えている。左手には茅ぶきの百姓家が所々にあるだけで、一面の雪の平原が大海原のように、ゆるくうねって広がっていた。

（中略）「おやおや、山がおかしくなってきたぞ。」

馭者が煙管をかざして、マッカリヌプリを指さした。何時の間にか、山とそのあたりの空がフン霧器で一面霧を吹いたようになっている。それが、見る間に濃くなって行くのが分った。風が出てきた。今迄はいくら櫓を早くしてもそうでなかったが、風が私達の頬を横なぐりになぐって、耳朶をならして飛んで行った。

「外の方がなんでもねえのに、この山麓だけ時々雨や嵐があつてね。雨雲や気がこの山さぶつつかって、そうなるんだべしね。——んで、よく荒れますよ。荒れ出したら、又大荒れでね。」



多喜二一行は、マッカリヌプリの麓まで来たところで吹雪に遭い、遭難しかけますが、逆の道を行っていたことが分かり、引き返して事なきを得ます。マッカリヌプリは大きな恵みをもたらす一方で、冬は大きな難関となったのでしょう。自然の前に人間はなんと小さいものかと、思い知らされます。

## 綾野まさる「郵便犬 ポチの一生」



⑦ 真狩村公民館「忠犬ポチ」

お次は、心温まる児童文学。真狩村を舞台にした、忠犬物語を紹介しましょう。

その犬の名は、ポチ。

大正7年の冬、電報配達に出発した真狩村郵便局の村上政太郎局長とその犬ポチは、その帰りに猛吹雪に遭い、遭難してしまいます。翌朝、探しに出た村人達は、息絶えた局長と、その身体に覆い被さりながら激しく吠えるポチの姿を見つけました。ポチは、激しい吹雪の中でひと晩中主人の身体を温め、助けを求めて吠え続けていたのです。

この話は、美談として村中のみならず北海道中に伝えられました。やがてポチは17才（人間でいうと100才くらい！）で大往生をとげ、剥製となって昭和40年から逡信遭難史の資料として東京逡信博物館に展示されていましたが、昭和62年、真狩村文化財保護審議会、真狩高校の生徒の熱意により、故郷に帰ってきました。

真狩村公民館に飾られている忠犬ポチは、愛らしい姿をそのままに、静かに村を見守っています。

のぐち うじょう  
野口雨情 「赤い靴」



⑧童謡 「赤い靴」 母思像

赤い靴 はいてた 女の子  
異人さんに つれられて 行っちゃった

横浜の 埠頭 (はとば) から 汽船 (ふね) に乗って  
異人さんに つれられて 行っちゃった

今では 青い目に なっちゃって  
異人さんの お国に いるんだろう

赤い靴 みるたび 考える  
異人さんに 逢うたび 考える

「赤い靴」 野口雨情 作詞  
本居長世 作曲

次に訪れたのは、童謡の「赤い靴」ゆかりの地です。

この歌は誰もが耳にしたことがあると思いますが、この主人公、きみの両親が留寿都村にいたことを知っている人は少ないのではないのでしょうか。

きみの両親は留寿都村の平民農場へ入植しますが、開拓生活の厳しさもあり、きみを宣教師ヒュエット夫妻に預けることになりました。やがてヒュエット夫妻は本国に帰ることとなりますが、そのとききみは結核に冒されており、一緒に連れて帰ることが出来ませんでした。きみは結局、孤児院に預けられ、母の顔を見ることなく、9才で亡くなりました。

留寿都村には、赤い靴公園があります。「母思像」と名付けられたこの像は、遠い空の彼方を眺めている無垢な瞳が愛らしく、あまりにも短かったきみの生涯を思うと、胸が痛みます。

像の横の説明書きには、「当時の開拓生活は相当苦労が多く、きみと同様の人生を送った子どもたちがたくさんいると思われる。「赤い靴」はその鎮魂歌といえるだろう。」とあります。開拓の影には、さまざまな犠牲があったことも忘れてはなりません。

道草とりっぴ

ここまで来たら、足を  
伸ばして・・・



俱知安風土館

〒044-0006

俱知安町北6条東7丁目3

開館 午前9時～午後5時 (入館は午後四時まで)

休館日 火曜日及び12月31日～1月5日

小川原脩美術館

〒044-0006

俱知安町北6条東7丁目1

開館 午後9時～午後5時 (入館は午後4時半まで)

休館日 火曜日及び12月31日～1月5日



懐かしもの好きにおすすめなのが、俱知安風土館。零式戦闘機の飛翼から、昭和のちゃぶ台、本物そっくりの剥製など、あなたの感性にビビッとくるものが必ずある(はず)!!

# 後志管内文学散歩 地図（羊蹄山麓編）



## 真狩村・留寿都村方面

※上下地図とも出典：国土地理院HP  
地理院タイル「電子国土基本図」を加工して作成



羊蹄山の麓で、自然の厳しさと戦いながらも開拓を続けてきた人々。その歴史の延長線上に、今のこの地域の恵みがあります。当時の苦労、数々のドラマ。その時代に生きていなくても、まるでそこにいたかのように感じ、知ることができるのが文学。心に残った作品に出会ったら、舞台となった地に赴き、その当時に思いをはせる。・・・そんな旅は、いかがでしょうか。

〈参考文献〉

「赤い靴はいてた女の子」 菊池寛 著 現代評論社 / 「田園日記」 林芙美子 著 青空文庫 / 「北海道文学ドライブ 第一巻 道央編」 木原直彦 著 イベント工学研究所 / 「北海道文学全集 第三巻 ヒューマンイズムの照明」 (株)立風書房 / 「郵便犬ポチの一生 吹雪に消えた郵便屋さん」 綾野まさる 著 ハート出版 (50音順) / 協力) 市立小樽文学館 玉川館長